

研究会報告

# 21世紀の資質・能力育成と保健体育の授業の可能性

——九州体育・保健体育ネットワーク研究会 2017 ファイナル in 福岡——

## What can be learnt in PE that develops children's attributes and abilities essential in the 21st century:

Kyushu Physical Education and Health and Physical Education Network Conference 2017 final in Fukuoka

佐藤 豊<sup>1</sup>・古川 善夫<sup>2</sup>・伊藤 久仁<sup>3</sup>・徳永 隆治<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部スポーツ教育学科

<sup>2</sup> 北海道教育大学, <sup>3</sup> 名古屋市立高蔵小学校, <sup>4</sup> 安田女子大学

(2017年9月28日 受理)

### 【要旨】

次期学習指導要領の公示を間近に控え、本シンポジウムでは、「21世紀の資質・能力育成と保健体育の授業の可能性」について、「資質能力の育成と体育授業から見たスポーツの貢献」というテーマから、シンポジウムの話題提供を求めた。まず、佐藤からは、スポーツそのもののとらえ方から見た保健体育の教育としての可能性の視点から、人間形成という視点でとらえていくことが主体的な学びや思考・判断・表現という新たな資質・能力の育成につながるという視点を示した後、古川善夫氏（北海道教育大学名誉教授）は「体づくり運動」の観点から、学習指導要領の変遷を踏まえ、体づくり運動で期待される資質・能力について、豊かなスポーツライフを形成することができるように横と縦の視点から検討することの必要性を提言した。伊藤久仁氏（名古屋市立高蔵小学校長）は、「小中」の接続からみた体育・保健体育授業の貢献の可能性を考える際、「知識、思考・判断」の整理の重要性を指摘した。徳永隆治氏（安田女子大学教授）からは、運動嫌い・運動機会の少ない児童に対して、小学校段階においても「する・みる・支える・知る」の多様な観点から体育科授業づくりが有効であるのではないかと提案があった。

21世紀型能力の育成は学校教育活動全体を通して育まれることや小中高の体系的な指導のゴールとして次第に身につけていくことから、資質・能力をイメージしつつも、保健体育としての内容を定着させる授業の充実によって、結果として資質・能力が育まれるものと言えよう。

期日：平成29年2月25日（土）

場所：福岡県立スポーツ科学情報センター（アクション福岡）

<sup>1</sup> SATO Yutaka: Department of Sport Education, Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama 225-8503, Japan

<sup>2</sup> FURUKAWA Yoshio: Emeritus Professor, Hokkaido University of Education

<sup>3</sup> ITO Kuni: Principal, Takakura Elementary School in Nagoya City

<sup>4</sup> TOKUNAGA Ryuji: Professor, Yasuda Women's University

# 1. 佐藤 豊（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部スポーツ教育学科）

## 1. スポーツのルーツと変遷

イギリスの産業革命以降に「余暇」時間を過ごすものとしての「スポーツ」が位置づけられ、次第に学校教育の中に「体育」という授業として入ってきたと言われる。その後、フランスに端を発する生涯学習の概念が出現し、文化活動やスポーツが、重要なアイテムとして取り上げられ、様々な立場・年齢・生活環境の人が楽しめるスポーツの在り方というものが広がり、「生涯スポーツ」という言葉も作られた。

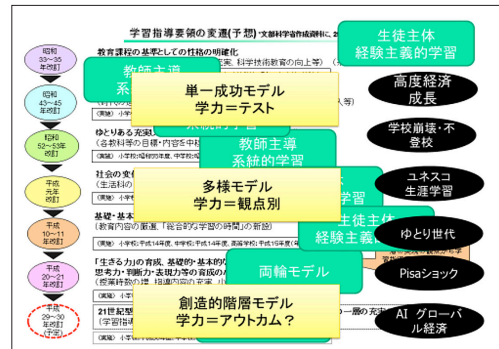
その中で、体育は体操や野外活動を含む概念として広くすべての国民の間に広がっていく。それは日本では「スポーツ振興法」、さらに2020年のオリンピック・パラリンピックの開催を通して「レガシー」としての「スポーツの多様性」や「する、みる、支える、知る」等の楽しみ方が今後の方向性と言われている。

## 2. スポーツ参加の範囲とパスウェイ

スポーツの育成モデルとして周知されているのは、ピラミッド型で、1番下にグラススポーツ、1番上の頂点にあるのはトップスポーツだという考え方であった。近年スポーツ観の変化に伴い、スポーツは子ども・青少年・大人にとっても、「する」「見る」「支える」等、すべての人々のものであり、エリートスポーツもその中に位置づけられるべきであるというイメージを、国際コーチング・エクセレンス評議会が示している。その時に、生涯スポーツや学校体育が担うものは何か。

## 3. 学習指導要領の変遷

戦後の学習指導要領を縦の時系列でみていくと、昭和33年以降から教師主体の系統的学習の傾向が強くなり、その後、多様モデルの時代が観点別学習評価と連動していった。平成15年の一部改定以降は資質・能力ベースの学力の再定義が話題となる。職業の半分



以上無くなってしまう時代が訪れる中、新しい仕事を生み出し、時代の変化に対応し、生き残る職業を作り出していく力が必要であると言われる。これを創造的階層の育成モデルと定義した。21世紀型能力は、教科単独で育成できるものではなく、体育の授業等の教科学習、総合的な学習等の教科外の学習と運動部活動のような発展的な学習機会のカリキュラムの総合体として資質や能力が形成されていくものである。教科が担う教育は、基礎力をしっかりと育成することを抜きにしてはならないだろうと考えている。

## 4. 学校教育活動全体にみる教育課程の構造

カリキュラム・マネジメントは3つの視点になされている。1つ目は教科内のカリキュラム・マネジメント、3年間の年間指導計画の中でどのように資質・能力を重点的育成するか、単元と単元のつながりをいかに円滑にするか、2つ目は教科と教科外との連携、保健体育科が育てた資質・能力を他の特別活動や道徳や総合的な学習の時間に繋げ、さらに学校活動全体に広げていくのか、3つ目は家庭や地域の人材等をうまく活かし、子どもたちの学びを深めるか、である。

アクティブ・ラーニングは、主体的・対話的で深い学び、能動的に頭を揺さぶるような学習活動を進めるということである。

## 5. スポーツで育てられる3つの力

21世紀型能力を考えた際、スポーツができること、約束を守るといった規範性は、今まで私たちが重視して育ててきた能力である。その上で、自らが納得し、思いやりや大切に

と感じて内発的な動機により守るという行動、普遍化した価値観からの行動化を導くことが大切と言える。こうした思いやりは、よりよい社会をつくっていく態度につながる。例えば多様性・社会参画・問題解決・創造性・合意形成等がスポーツに期待される教育成果ではないだろうか。スポーツで育てられる第3の力こそが、社会を守り、よりよい社会を作る力に繋がる。

しかし、ここだけやってしまうと体育ではなくなり、道德の授業と差異がなくなる。体育そのものの楽しさを追求できる力、それを感じられる力、スポーツそのものを素材として我々がどう提供できるかにかかっていると見える。それを感じさせながら育てられる力は、社会を守る規範的なものと、社会に参画し変えていく力等、その3点で資質・能力をバランスよく育むことがとても大切だと私は感じている。

また、3つの視点にも、小中高での重点は少しずつ変化させてとらえることも必要である。生涯スポーツにつながる高等学校でのゴールイメージとしては、社会と関わっていく力の育成を次第に広げていかなければ「する」「みる」「支える」「知る」というスポーツを多様に楽しめる力は身につかないのではないだろうか。



## II. 古川 善夫 (北海道教育大学名誉教授)

### 1. 体操と体づくり運動に関わって

「体操」が学習指導要領で「体づくり運動」になった。「体ほぐし」という運動が入ったが、この運動は心地よくみんな仲良く体を楽しく動かすものである。それを行うことでみんながスポーツに親しめる。このような考え方を体操だけではなく、スポーツの中に入れようという考えが私のやってきたことである。「体ほぐし」と「体力を高める運動」に体づくり運動を別け隔てたが、上手く体ほぐしをして心が乗ってきた時に、自分の体を気持ちよく動かして、動いた後にやっぱりなんかスッキリしたということを目指した。「体力を高める運動」については従来の「体操」の領域である。「体力を高める運動」の中では、体力要素を学び、トレーニングの意味を意識の中で作り上げ、必要性を理解させてきた。平成20年の改訂時も同様であったが、その時には「組み合わせる」ということを基にして、自分に合った運動を選んで、それを組み合わせる「体づくり運動」を作るということにした。自分で自分の体の動きを感じ、さらに知識を基にしながら運動をしていくという内容が平成20年の改訂である。しかし私は、その考えに立った上で、体の動きそのものを見ながら、そこに色々な人、もの、音などを工夫しながら、「体操とゲーム」という形で実践している。「ゲーム」は、体操の動き(体の動き)を含みながら、人、もの、

体操と体づくり運動に関わって		
体操 平成元年1989	体づくり運動 平成10年1998	体づくり運動 平成20年2008
(1) 自己の身体に 関心をもち、体力の現状を 把握し、自らを高める ための運動 (2) 自己の身体に 関心をもち、体力の現状を 把握し、自らを高める ための運動 (3) 自己の身体に 関心をもち、体力の現状を 把握し、自らを高める ための運動	(1) 自己の身体に 関心をもち、体力や生活 環境に応じた運動をもつて、 体ほぐしをする (2) 自己の身体に 関心をもち、体力や生活 環境に応じた運動をもつて、 体ほぐしをする (3) 自己の身体に 関心をもち、体力や生活 環境に応じた運動をもつて、 体ほぐしをする	(1) 体を動かす楽しさや心地よさを味わい、 体力を高め、目的に達した運動を身に付け、 意欲を高めること (2) 自己の身体に 関心をもち、体力や生活 環境に応じた運動をもつて、 体ほぐしをする (3) 自己の身体に 関心をもち、体力や生活 環境に応じた運動をもつて、 体ほぐしをする
1975～1984 手具体操 楽しみ体操 ものづくり 動きづくりと体づくり Gymnastrada 1975	1985～1995～2004 体操とダンス体操の考え方を体操に つなげる おと・ひとの工夫 体ほぐしの運動は体ほぐし 体力を高める運動はトレーニング型 動いて学ぶ、学んで動く体協学会 2000	2005～2015 体操とゲーム 動ける人々のための ひと・ひと・ひと(人・人・人)の(体)道具(人・日常 品)おと(メディア・音)の工夫 Sport Forum Mals 2015 台湾体育学会2014、2015

音を工夫しながら、みんなで関わって動く楽しさを持っていくことを目指している。

## 2. 体づくり運動で期待される資質・能力

体ほぐしの運動で、新聞紙を切って、2人で肩を組んで一緒に仲良く走るという運動がある。運動後に自分は体づくり運動で何が知識として必要か、どんな運動ができるかを少し考えて欲しいと思う。そのことが、体づくり運動の意義、強調して言っている運動の行い方、そういうものを選んで組み合わせる力を育てるために大切になる。活用シートや身体活動水準だとか、色々な表があるが、運動時間を増やす、また生活に必要な運動の量をどのようにして決めていくかを考えることも大事であると思う。そういうことが出来る能力が、体づくり運動で期待される資質・能力だと思う。

## 3. 考え方・見方が変われば、授業が変わる・広がる・高まる授業改善

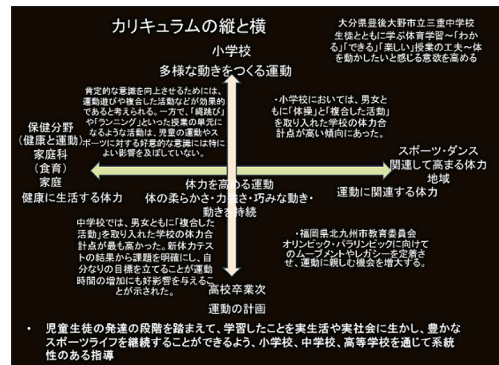
新体力テストの結果や体力の向上について目標設定を促すことや授業で学んだことを授業以外の場面で活用することは、運動時間の増加、運動の習慣化に繋がると考えられる。従って、目標設定をどうするか、その目標をどのようにとらえるかが、授業改善に繋がる。数値だけでは目標は決められない。体の動きを数値化することは難しく、自分の体を知り、自分の体をうまく使うことができるという視点をもつことが大切である。

中学校においては授業の目標を示すが、それを数値目標で示すか動きで示すかが問題になる。

運動の二極化について、運動しない子に生活改善や運動時間の増長を促すのは大変難しい。運動が苦手な子に積極的な取組みをさせる時、スポーツや体操はこんなにいいよ、こんなに楽しいよと、できない子に教えたい。それは態度だとかマナー等ではなく、ゴルフマインドだとかスポーツマインド、心の重み、みたいなものだと思う。男女別に授業行っている小学校が多いが、私は男女共習の授業、全て男女共習を推進している。

## 4. カリキュラムの縦と横

小学校の体の動きを作る運動から中学校の体力を高める運動、高校卒業時では自分の運動の計画作成というカリキュラムの縦のつながりを考えこの10年間やってきた。横の繋がりが保健分野であり、家庭科や食育での健康に関わってくる。児童生徒の発達を踏まえて、学習したことを実生活・社会に生かし、豊かなスポーツライフを形成することができるよう横と縦を上手く系統立てていかなければならない。



## Ⅲ. 伊藤 久仁（名古屋市立高蔵小学校校長）

### 1. 教育改革と振り子

教育改革と振り子ということ、これは「学力を育てる」清水氏の議論に寄っている。

戦後の教育改革は、「態度」と「知識」の間で振り子のように揺さぶられてきたという話である。

今、次の学習指導要領を出そうとしている文部科学省は、バランスのとれた確かな学力の育成を重視したいと言っている。世の中が誤解をしているアクティブ・ラーニングというものは、グループ学習であり、話し合い活動であるという方向に行っているのは、絶対違って、やはり、脳がフル活動しているような授業を仕組んでいくことが、これから求められるのではないかなと考える。ようは「思考・判断」だと、個人的には答えている。

### 2. 学力のとらえ方



今回の学習指導要領の改訂では、資質・能力の枠組みは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現」「学びに向かう力・人間性」という整理になっている。現行学習指導要領の中学校は、「技能」「態度」「知識、思考・判断」で整理されている。この「知識、思考・判断」の塊というものは、認知領域の塊であるので、とても整理がしやすい。「ひとつの知識、既習事項を使えば次の知識が獲得できる。」という関係性にあるのが、「知識、思考・判断」の整理だと思う。

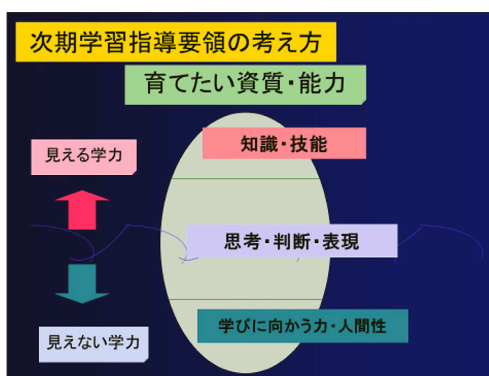
まず、中学校の例から考えてみると、割と知識をベースに「思考・判断」をして、次の知識を獲得するということができる。中学校の陸上について例を示す。加速の原理では、人はいきなりトップスピードにはならない。また合計タイムよりリレータイムが速い。このような知識を獲得していく。そうすると、ダッシュマークを決定するにはどうすればいいかという思考が働き、ダッシュマークを決める知識を獲得する。そして、自分たちのチームの課題ができる。よく知識の獲得と技能の高まりもなく、自分たちのチームの課題を考えるという授業があるが、それは不十分ではないかということをいつも感じる。

しかし、小学生ではそれは無理であると思う。例えば、「アンテナぴんからの前転」を経験させて、開脚前転に展開させても、そこに小学生なりの知識というのが必ずあって、それをきちんと子どもたちに伝えずに、経験させて自然にできるようになったでは不十分だと思う。「くまさん歩きからの前転」で子どもたちに、「これしてみてもうだった?」「普通の転がりと比べてどんな感じ?」と発問すると、「ふつうに転がるよりも頭がクルッと中に入っていった」とか「くまさん歩きからだと、お尻がすごく上に上がっている」のような回答があればいい。「くまさん歩きから前転すると、腰の位置が高くて回りやすい」というふうに言わなくても、子どもが思った知識が大切になる。大人の言葉を知識にする必要はなく、子どもの言葉で表出するこ

とが小学校3年生の知識であり、それを知識として獲得していれば、それを使って、次の「知識・技能」に結びつけていく必要がある。

### 3. 体育の見方・考え方

学習指導要領の改訂で「見方・考え方」ということが、どの教科にも明示された。体育では、「する・みる・支える・知る」が、キーワードになる。中学校の現行学習指導要領では、体育理論のところで、「する・みる・支える」という言葉が出てくる。では小学生は、そういうことは関係ないのかというと関係ないわけではなく、小学生期から運動・スポーツの価値を教え、小学生なりの「する・みる・支える・知る」を授業の中でやっていく。当たり前に行っていることであるが、それにとっても価値があり大事なことだという自覚を促すことが必要だと思う。



## IV. 徳永 隆治 (安田女子大学教授)

### 1. 運動嫌い、運動しない子へのアプローチ

オリンピックは、国やメディアが大きく取り上げることで、運動が好きでない、運動に関心のない人たちも、スポーツの価値に知らず知らずにはまっている。大人バージョンの「する」「みる」「支える」「知る」がある。これを小・中学生バージョンで置き換え、児童生徒の実態で考えると、運動をしない子たちを運動好きにしていけないと、生涯を通じて健康に過ごせる生涯スポーツの道は開かれな

運動やスポーツをすることが好きな子どもの体力				
●運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか				
	小学校 男 子	小学校 女 子	中学校 男 子	中学校 女 子
全国 平均	73.0 %	56.8%	63.2 %	46.8 %
評価Aの 平均	96.5 %	89.0 %	89.8%	79.3 %
【平成28年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」集計結果(28年12月)をもとに作成】				
運動やスポーツが好き ⇔ 体力評価が高い				

い。運動しない子どもは、「する」はないとしても、「みる」「支える」「知る」を通して、興味・関心を高めていくようにすることが大切ではないかと思う。一方で、運動やスポーツが好きだということと体力評価が高いということは相関している。やはり、体力向上を図るためにも、楽しい授業でないといけないし、運動・スポーツが好きになっていかないといけない。「運動好きにする」「できるようにする」「行い方を知る」ということ、特に、「知る」ということが今回の学習指導要領の改訂で重点化されていると思うが、「友達と一緒にする」ことを、具体化する授業が求められているわけである。

## 2. 新しい学習指導要領が求めているもの

改訂学習指導要領では、資質・能力としての「知識・技能」、つまり理解し知ることが大事な指導の内容になってくる。それから、「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」。これらを、資質・能力として問われるということから考えても、体育の授業で、「できる」ということと同時に、体育でどんなことを「知る」「理解する」「わかる」そういうことが重視されなければいけないということになる。それが、主体的な学びにもなり、対話的な学び、協働的な学びにもなり、深い学びにもなるわけである。これは、スパイラルに高まっていくことによって、よりいっそう主体的・対話的で深い学びになっていくと思う。

## 3. 「する、みる、支える、知る」の観点からの授業づくり

小学校の台上前転を扱う授業において、見合う場面では、単にただ「みる」だけではなく、まず、見る視点を先生が与え、見る視点を絞る。これが教師の大事な役割になる。台上前転のポイントをあたかも子どもが見つけたように仕掛ける。時間をかけながら発見の場面を作っていくことが、動きを見ながら思考・判断するということに繋がる。このような場面は毎時間作るのではなく、単元計画の中で、ポイントをきちんと押さえる時間作ることが大事である。また、自分の課題を自分たちが明確にしていく、自己解決させていくこともとても大事になる。みんなで「みて」、「知って」それを基に練習し、できるようになっていくという過程を経験することが授業の中で大事であり、そのことが他の学習での学び方へ広がっていく。関わり合う、話し合ったり、見合ったり、助言し合ったり、補助し合ったり、相互に評価し合ったり、そういった活動をしやすい教材を考えることは重要である。

## 4. 子ども自身が自己課題を明確に持った学習

主体的な学び、協働的(対話的)な学び、深い学びの実現には、子ども自身が自分で課題を見つけその解決に向けて練習をすることが重要である。しかし、その自己課題は、何をしてもいいというものではない。「教えたこと」「学びたいこと」にしていくため、教師の働きかけが問われている。また、その子进行评估することは、その子に自信を持たせる、達成感をもたせると同時に、周りの子にも気付かせていく。つまり、評価することが実は指導することになる。また、子ども同士、仲間に伝えるということを実現すること、それもやはり「する・みる・支える・知る」という観点、多様な観点からアプローチをしていくが必要になる。

＊ 本研究は、平成27年度～30年度科学研究費助成事業(基盤研究(B))課題番号15H0364)の研究報告の概要である。